

1 学校経営PDCAサイクルを確立し、学校運営の改善を図る

重点目標	評価項目(具体的な取り組み)	番号	主担当	評価の指標	実現状況の達成度基準	備考	2月結果	12月結果	7月結果	成果(○)課題及び改善策(▲)	2月評価	12月評価	7月評価
学校経営PDCAサイクルを確立し、学校運営の改善を図る	①校務の分担、リーダーの役割と責任の明確化	1	教務	【成果指標】毎月学校経営会議・主任会・校務部会を計画的に開催し、チームごとに話し合いを行っている	肯定的な評価の割合(学校経営会議・主任会・校務部会) A: 昨年度の反省点や問題点から、課題を明確にしている B: 会の前に提案の準備ができています C: 昨年度の課題が把握されないまま提案している	実施時期: 7月・12月・2月	部会で前年度の反省をもとに話し合っている	部会で前年度の反省をもとに話し合っている	計画的に開催できないうちも、個別で提案すること	○校務部会の時間を毎月設定し、開始時刻を明示したことで、スムーズに部会が開けるようになった。 ▲来年度は行事等を精選すること	A	A	B
	②OJTやミニ部会による共通理解と共通実践の推進	2	教頭	【成果指標】研修を振り廻り、自己評価で振り返っている	肯定的な評価の割合(教員アンケート2) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	92%	91%	○担当が受け回したり、校務パシオで実践を促すことにより、主眼職での実践が実行されている	A	A	A
	③若手とベテランの互いの長所を伸ばした風通しのよい職場づくり	3	教頭	【努力指標】校務分掌を若手とベテラン進級で担当したり、教材研究の相談をしたりしている	肯定的な評価の割合(教員アンケート3) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	92%	100%	○相互評価に職員が積極的に参加し、お互いのよい所を取り入れようとしている。 ▲教務研究や研修時間になることが多く、日報の工夫が必要である。	A	A	A
	④危機管理と服務規律の遵守の徹底	4	教頭	【成果指標】公務員としての立場を理解し、危機管理と法令遵守の徹底のための自己研鑽を徹底している	肯定的な評価の割合(校内研修・職員会議・終礼) A: 充分取り組んでいる95% B: 取り組んでいる90% C: 充分とは言えない80% D: 不十分である	実施時期: 7月・12月・2月	職員会議1回 終礼時1回	終礼時3回	終礼時7回	○終礼で事実をもち、危機管理意識を高めるようにしていること、服務規律が徹底できている。 ▲終礼の時間短縮による朝の出勤遅れを減らすこと。	A	B	C
	①学校経営評価計画を基に、PDCAサイクルによる工夫・改善	5	教頭	【努力指標】それぞれの職員に現職化に向けて、計画的な提案と中・短期的な評価を実施しながら、改善している	肯定的な評価の割合(教員アンケート5) A: 充分取り組んでいる95% B: 取り組んでいる90% C: 充分とは言えない80% D: 不十分である	実施時期: 7月・12月・2月	91%	82%	100%	○学期ごとに学校評価を活用し、レポートの進捗状況を共通理解してきていること、それぞれの部長で改善策が提案されていること。 ▲主任会で進捗の把握や指導を促す必要がある。	B	C	A
	②学校運営委員会及び主任会で、学校が抱える課題の課題を把握	6	教務	【成果指標】運営委員会・主任会で出された課題への手立てを全職員と共通理解して取り組んでいる	肯定的な評価の割合(校内研修・職員会議・終礼) A: 充分取り組んでいる95% B: 取り組んでいる90% C: 充分とは言えない80% D: 不十分である	実施時期: 7月・12月・2月	主任が機能し、主任から連絡・調整が図られるようになった	主任が機能し、主任から連絡・調整が図られるようになった	終礼のない日は確認できていない	○終礼や職員会議で課題への改善策を伝えることで、学期での指導の徹底を行うことができる。	A	A	C
	③「チーム和意」を言葉に、報告・連絡・相談を密にする	7	教務	【努力指標】一人でも問題を抱えず小さなことでも報告・連絡・相談を行っている	肯定的な評価の割合(教員アンケート7) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	100%	○児童どうしのトラブルや保護者からの連絡について、すぐに管理職に報告し、早めの対応を心がけた。	A	A	A
	①校務部と研究部の構成員の統一と部会や各種会議の効率化	8	教務	【成果指標】それぞれの部会の構成員の担当を明確にし、計画的に会議を進めるため、会議終了時間のゆとりや効率的な提案の仕方を示している	肯定的な評価の割合(校内研修・職員会議・終礼) A: 充分取り組んでいる95% B: 取り組んでいる90% C: 充分とは言えない80% D: 不十分である	実施時期: 7月・12月・2月	主任を中心とした担当が明確になった	予定時間内に会議を終えることができた	会議の時間延長となる場合が多い	○主任を中心とした担当が明確になったこと、スムーズな意思疎通が図れていること、主任の役割が明確になったこと、主任の役割が明確になったこと、主任の役割が明確になったこと。	A	B	C
	②学校評価による継続的な働き方の改善	9	教頭	【成果指標】検校時目標を示し、達成できていない部分を把握し、達成できない職員の原因と改善策を示している	肯定的な評価の割合(勤務時間報告) A: 充分取り組んでいる95% B: 取り組んでいる90% C: 充分とは言えない80% D: 不十分である	毎月	遅校時刻が20分以内になる職員がいない	80時間を超える職員がいない	80時間を超える職員がいない	○仕事の優先順位をついて、計画的に仕事を進めることができるようになった。 ▲学校教員、児童数増加に向けての準備が必要である。20時検校時刻を達成できている。	B	B	C

2 確かな学力を身に付け、意欲的に学び合う児童の育成

重点目標	評価項目(具体的な取り組み)	番号	主担当	評価の指標	実現状況の達成度基準(評価方法)	備考	2月結果	12月結果	7月結果	成果(○)課題及び改善策(▲)	2月評価	12月評価	7月評価
確かな学力を身に付け、意欲的に学び合う児童の育成	①学力向上ロードマップを活用しながら、きめ細やかな指導体制を確立する	10	授業力	【努力指標】相互参観を実施することで、研究の重点を置いた授業実践につながっている	肯定的な評価の割合(教員アンケート10) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	90%	○授業を中心とした指導で、教師の工夫・ICTの活用で工夫が実現できていること、きめ細やかな指導体制が実現されていること、学年ごとに進捗が把握されていること、学年ごとに進捗が把握されていること。	A	A	A
	②学力調査結果の分析や個別指導などの集約を行い、付加価値を明確にした授業実践	11	授業・計核・証分	【努力指標】学力調査の結果から明確になった「付加価値」を意図した授業をしている	肯定的な評価の割合(わくたまチャレンジ正解率) A: 90%以上 B: 75%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	年3回	80%	64%	49%	○学力調査の結果から明確になった「付加価値」を意図した授業をしていること、学力調査の結果から明確になった「付加価値」を意図した授業をしていること。	B	D	D
	③「聞く・話す」力の定着とコミュニケーションの育成	12	学力向上	【成果指標】「学習の構え8項目」チャレンジで学習の構えが達成できている	肯定的な評価の割合(学習の構え8項目チャレンジ児童のふり返り) A: 90%以上 B: 75%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	8のつく日	85%	95%	96%	○学習の構え8項目チャレンジで学習の構えが達成できていること、学習の構え8項目チャレンジで学習の構えが達成できていること。	B	A	A
	④集団的・計画的な帯タイムや朝学習を活用した学力の定着	13	学力向上	【努力指標】学力向上タイムスケジュールをもとに、全教職員で計画的に取り組んでいる	肯定的な評価の割合(教員アンケート13) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	63%	50%	50%	○授業時間外に学習が定着しており、児童が主体的に学習していること、朝学習が定着していること、朝学習が定着していること。	C	D	D
	⑤家庭との連携を強化し、家庭学習や「毎朝パーフェクト入札」等の取組による家庭学習の定着・充実	14	学力向上	【努力指標】毎月の「毎朝パーフェクト入札」や「よい自学の日」の取組から基礎・基本が定着している	肯定的な評価の割合(和倉検定結果)合格者割合 A: 90%以上 B: 75%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月	国語 79.0% 算数 81.0%	国語 84.0% 算数 95.8%	○児童からの声かけで検定合格への意欲が高まっていること、家庭学習が定着していること、家庭学習が定着していること。	B	A	A	
	⑥既習を活かして学びにつながるタイムリー提示	15	授業力	【努力指標】児童の学習履歴の活用による適時適宜な授業・個対面での指導・指導を徹底している	肯定的な評価の割合(教員アンケート15) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	88%	80%	70%	○授業に向けて計画的に取り組むことができた。 ▲来年度も児童の学習履歴の活用による適時適宜な指導を徹底していく。	B	B	C
	①校内研修や要請訪問を積極的に取り入れ、学校経営を推進する	16	授業力	【努力指標】指導案検討・模擬授業・研究授業・整理会を実施し、次の授業者へ改善点を明確にしている	肯定的な評価の割合(教員アンケート16) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	78%	100%	100%	▲3学期研究授業を行っているため、研究に結びつけたいところがある。来年度は研究授業に研究授業を行うようにする。	C	A	A
	②「授業が児童と向き合える一番の場」の共通認識のもと、わかる授業の推進	17	授業力	【努力指標】相互参観を実施し、発問・学び合い・学びの姿の場面で児童の学びの場への関わり方について改善点を共有している	肯定的な評価の割合(教員アンケート17) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	100%	○児童のよいところを見つけて活動年を通して実施することで、児童の学びの場を明確にすることができた。 ▲相互参観で児童の学びの姿を授業者に伝えるようにする。	A	A	A
	③付加価値を明確にし、学びの実感が持てる授業実践	18	授業・計核・証分	【成果指標】週末の算数日記から児童の姿が見られる振り返りを全教職員で共有している	肯定的な評価の割合(算数日記の自己評価) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	毎月	算数日記の交流で児童の学びの共有ができた	算数日記の交流で児童の学びの共有ができた	算数日記を全職員で共有できていない	○毎月の算数日記交流で、職員どうし算数ノートを見せ合い、児童の姿を共有し、児童の学びの場を明確にすることができた。 ▲算数日記の共有ができていない。	C	C	D
	④「相互参観参観」による授業改善	19	授業力	【成果指標】参観シートをもとに終礼で全教職員で改善点を出し合い、授業改善に役立っている	肯定的な評価の割合(相互参観ミニ研修会実施) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	毎月	100%	100%	100%	○参観に留まらず、改善点まで話すように努めることができた。 ▲終礼の時間だけでなく十分に伝えることができた。	A	A	A
⑤学習意欲を高めるICT機器の効果的活用	20	情報	【成果指標】ICT研修会やICTサポートの有効的な活用を授業者に提案し、ICTの活用を進めている	肯定的な評価の割合(研究授業でのICT活用) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	随時	8/8学級	8/8学級	5/6学級	○授業でICTを活用していること、ICTサポートを活用していること、ICTサポートを活用していること。 ▲特別支援学級にデジタルテレビを活用している。	A	A	C	

3 思いやりがあり、自尊感情の高い児童の育成

重点目標	評価項目(具体的な取り組み)	番号	主担当	評価の指標	実現状況の達成度基準	備考	結果	結果	結果	成果(○)課題及び改善策(▲)	2月評価	12月評価	7月評価	
思いやりがあり、自尊感情の高い児童の育成	生徒指導の充実	①児童会及び縦割りの活動や地域とのふれあい活動の実践	21	児童会	【成果指標】全校児童が縦割り行事に楽しく参加している	肯定的な評価の割合(児童・保護者アンケート3) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月	児童93.0% 保護者91.3%	児童90.5% 保護者92.9%	○縦割りの行事を計画的に行うことのできる。 ▲学年毎に向けて成果と課題を明確にし、めざす児童会へ近づける学習を工夫する必要がある。	A	A	A	
		②思いやり挨拶の定着	22	生徒指導	【成果指標】挨拶当番や挨拶ボランティアに参加している	肯定的な評価の割合(児童アンケート4) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月	89.0%	84.1%	○意識が定着してきている。 ▲挨拶の学習には、声かけを促すこと、観察力や思いやりを促すこと、丁寧な声かけを促すことなどが必要である。	B	B	B	
		③生活アンケート・QJ読書・児童理解会議の定期的・計画的な実践	23	生徒指導	【成果指標】児童理解の会を確実に実施している	肯定的な評価の割合(総礼時児童理解の会実施) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	毎月	校内委員会等で定期的に行っている	○定期しながら実施できたが、実施できなかった	○定期実施しているが、実施できなかった	○意識が定着しているが、実施できなかった	A	A	B
		④生徒指導の3機能を活かした居場所づくりと絆づくり	24	生徒指導	【努力指標】QJ読書を活かして学級の実態から個への支援や言葉かけを全教職員で共有する機会を設けている	肯定的な評価の割合(教員アンケート24) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	年2回	100%	100%	○3学期初めにQJ研修会を行い、児童の指導を生かした。○校内委員会、異学年児童への対応などを行い、全職員で共通理解を促している。	A	A	A	
	心の教育の充実	①道徳の授業の積極的な公開と計画的な実践	25	研究	【成果指標】年間計画に基づき計画的に実践し、改善を進めている	肯定的な評価の割合(教員アンケート25) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	80%	○道徳の授業スタイルができ、年間通しての授業実践できた。	A	A	B
		②「よいことみつけ」や積極的なエンカウンターなどによる自己肯定感を高める工夫	26	生徒指導	【努力指標】児童が自分のよいことを見つけて、自己肯定感が高まってきている	肯定的な評価の割合(児童アンケート13) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月	84.0%	83.3%	○全校職員・準の会でタイムリーに児童のよいことみつけが、児童の自己肯定感を高めた。 ▲自己肯定感を高めるための工夫を、各学年で実践している。	B	B	B	
		③伝統芸能、地域学習、施設訪問などを通じた郷土愛や他者理解の心の育成	27	担任	【成果指標】ふるさとに関わる学習や体験活動を計画的に取り入れている	肯定的な評価の割合(教員アンケート27) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	70%	90%	90%	○地域学習や体験活動を実施できた。 ▲地域人材を活用した学習を系統的に行い、児童の郷土愛を育成していく必要がある。	C	A	A
		④無言清掃で考える力と見つける力の育成	28	保健	【努力指標】児童が自ら工夫して無言清掃に取り組んでいる	肯定的な評価の割合(児童アンケート11) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月	95.0%	93.7%	○無言清掃が定着してきている。 ▲清掃活動が児童の自主性を発揮する機会となっているので、必ずこの機会を行っている。	A	A	A	

4 安心・安全で家庭や地域から信頼される学校づくり

重点目標	評価項目(具体的な取り組み)	番号	主担当	評価の指標	実現状況の達成度基準	備考	結果	結果	結果	成果(○)課題及び改善策(▲)	2月評価	12月評価	7月評価	
安心・安全で家庭や地域から信頼される学校づくり	信頼される学校づくり	①前例踏襲とならない教育活動や行事の計画的な実践	29	教務	【努力指標】昨年度の振り返りを生かして、前年度と変更点を明らかにした提案・取り組みを行っている	肯定的な評価の割合(教員アンケート29) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 61%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	82%	○前年度の反省点から組合で取り組みを見直すようになった。 ▲前年度の反省点からの改善点を明確にし、来年度に引き継いでいく。	A	A	B
		②保護者・地域との連携と外部人材の活用	30	教頭	【努力指標】各教科及び道徳や総合の時間において、ゲストティーチャーなど地域の人材を活用している	ゲストティーチャーを活用した授業実践の学年 A: 全学年 B: 4・5学年 C: 3学年 D: 2学年以下	実施時期: 7月・12月・2月	1, 2, 3, 4等	全学年	5年	▲道徳は、研究授業・発表会・授業参観以外のG.Tの活用ができなかった。G.Tを活用しやすいような手立てが必要である。	B	A	D
		③保護者・地域の意見を学校評価に生かした学校運営の改善	31	教頭	【成果指標】教員・保護者・児童アンケートの結果から改善点を保護者・地域に知らせている	肯定的な評価の割合(お便り・HP・学校説明会の実施) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	学期毎に1回	学校関係者評価委員会後保護者に知らせる	学校関係者評価委員会後保護者に知らせる	学校関係者評価委員会後保護者に知らせる	○アンケートを生かし、学校評価から改善点を明確にして取り組むことができる。 ○学校より、学校関係者評価委員会・HP・学校説明会で知らせることができる。	A	A	A
	健康の保持推進・安全管理	①「早寝・早起き・朝ご飯」を推進する	32	保健主事	【努力目標】毎日、早寝早起き朝ごはんに努めている	肯定的な評価の割合(教員32・児童6・保護者6アンケート) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	学期毎に1回	教員89% 児童88.0%	教員100% 児童92.1%	教員81% 児童87.3%	▲取り組みは行っているが、改善が定着するまでには至っていない。保護者の呼びかけをさらにしていく。	B	B	B
		②体力アップ1校1プランやスポチャレいしかわの実践	33	体育担当	【成果指標】計画的に体育の授業に体力アップ1校1プランやスポチャレいしかわを取り入れている	体力アップ1校1プランやスポチャレいしかわの実践 A: 全学年 B: 4・5学年 C: 3学年 D: 2学年以下	学期毎に1回	体力アップ全学年スポチャレ実践全学年	体力アップ全学年スポチャレ実践全学年	体力アップ全学年スポチャレ実践2年・3年	○2学期の強化期間には実践できた。 ▲年間通じて継続してできる。改善を定期的に見取り計画を工夫が必要である。	A	A	C
		③幼保への定期訪問と情報交換を密にして小1プロブレムの防止	34	教頭	【努力目標】幼保との連絡を訪問や電話、メールで行い、情報交換に努めている	肯定的な評価の割合(教員アンケート34) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	70%	64%	80%	○道徳の授業では系統的に小中連絡を密に行っている。 ▲道徳以外では保護者・中学校との連携が十分である。授業参観の機会を密にし、道徳の授業の質向上を図る必要がある。	C	C	B
		④中学校教員による実技指導、出前講座の実施	35	教務	【成果指標】小中のつながりを重視して、道徳的価値に関連した出前講座を計画的に行っている	出前講座の実施 A: 3回 B: 2回 C: 1回 D: 0回	学期毎に1回	0回	1回	0回	▲外国語で中学校の先生が出前講座が1回できたが、それ以外の出前講座は計画できなかった。 道徳の授業の質向上を図る必要がある。	D	D	D
		⑤適切な管理・監視と点検業者との連携	36	事務	<努力目標>安全点検の結果から管理・監視の連携を迅速に行っている	肯定的な評価の割合(教員アンケート36) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	81%	○中で安全点検を実施すること、責任をもって点検を行っている。 ▲管理業務ができていないところについては、今後も依頼していく。	A	A	B
		⑥短期・中期での予算執行の可視化	37	事務	【成果指標】予算の執行具合を可視化し、職員に示している	肯定的な評価の割合(教員アンケート37) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	100%	100%	91%	○出先の連携の提案を提出、必要は教員等の早期の購入に計画的に執行している。 ▲職員全体に予算執行について、年度当初から意識させていく。	A	A	A
		⑦適切な予算執行のための職員への意識強化	38	事務	<努力目標>予算の適切な執行を重視し、紙などの無駄使いをなくす取組を進めている	肯定的な評価の割合(教員アンケート38) A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 60%以上80%未満 D: 60%未満	実施時期: 7月・12月・2月	91%	83%	91%	○印刷の無駄使いが減少した。 ▲2つのプリンターとカラーと白黒の使い分けを十分徹底していく必要がある。	A	B	A

平成30年度 学校評価の結果からの考察

成果

1. 学校経営PDCAサイクルを確立し、学校運営の改善を図る

組織的な学校運営については、高い評価がみられた。今年度から校務分掌を精査し、部会ごとに複数での学校運営をしたことが要因だと思われる。

前期は時間の確保に課題がみられ、部会での取組内容を十分念査できなかったことが反省点として挙げられた。しかし、後期では、昨年度の反省をもとに、前例踏襲を脱却した提案と児童の実態からさらなる取組の改善を、それぞれ部員同士で意見を出し合っている姿がみられるようになった。

また、組織的な運営がなされてきたことで、教員同士の人間関係もよく職員室内で互いの学級経営や教材研究について相談し合い、報告・連絡・相談も徹底できてきた。

2. 確かな学力を身に付け、意欲的に学び合う児童の育成

学力向上のための取り組みとしては、学力向上ロードマップ・相互参観の取組が有効であった。

授業づくり部会での毎月の相互参観計画と全教員での振り返りの時間の設定により、教師の授業力向上につながった。

基盤づくり部会では学力向上ロードマップにのっとりた帯タイム計画と和倉検定の検証が児童の学力向上につながった。

3. 思いやりがあり、自尊感情の高い児童の育成

生活アンケート、Q-U調査、児童理解の会等で、児童への積極的な生徒指導を行ってきたことが評価された。

また、今年度県の指定を受けた道徳の研究により、「考え議論する道徳」の授業スタイルを構築することができ、児童の自己肯定感にもつながった。

縦割り班での無言清掃、ふれあい活動の取組については、年間通じて高い評価が得られた。同学年だけでなく異学年に対しても思いやりの心を育てる場となっている。次年度もねらいを明確にしながら、縦割り班活動を継続していきたい。

4. 安心・安全で家庭や地域から信頼される学校づくり

保護者アンケートや民生委員等の地域の方の意見を生かし、学校評価から改善点を見出し、学校運営を行ってきたことが評価された。また、学校便り・HP・メール・学校説明会でも学校の様子を知らせ、保護者が学校の取組に関心が持てるようにしてきたことで、授業参観の参加率も高くなった。

課題

1. 学校経営PDCAサイクルを確立し、学校運営の改善を図る

主任会の時間の確保が難しく、職員会議の提案を検討するだけに留まった。学校経営ビジョン達成に向けて方向性を確認しあう場となるような主任会を設定していく必要がある。働き方の改善については、時間外勤務が80時間を超える職員はいなくなった。しかし、次年度も学校訪問や授業参観、研究授業、行事があると、時間外勤務が増えるのは必至である。次年度は会議の時間確保のため日課の工夫を行うとともに、行事等の提案は早めに行い、担当者が先を見通して声かけするように心がけていく。

2. 確かな学力を身に付け、意欲的に学び合う児童の育成

1日3回の帯タイムで学力の定着を図ってきたが、昼の時間の帯タイムが5限目にずれこむことが多かった。授業時間内に自己の学習を振り返る時間を確実に保障するためにも、帯タイムの回数や方法を見直していく必要がある。

今年度、県の道徳教育の指定を受けていたため、研究授業が1学期に集中した。研究授業から改善点を明確にし、めざす児童像を実現していくためにも、次年度は年間通じて研究授業を行っていくように計画する。

今年度児童につけたい力として「目的意識をもって複数の資料から必要な情報を取り出し、筋道を立てて説明する力」を挙げて、取り組み、「わくたまチャレンジ問題」や「算数日記」から検証を行ってきた。児童の書く文章に変容は見られたものの、まだまだ到達には至っていない。次年度も「わくたまチャレンジ問題」や「算数日記」からの検証をもとに、児童の学力向上につなげていく。

3. 思いやりがあり、自尊感情の高い児童の育成

集会や帰りの会等で、タイムリーに児童のよいところを認める場を持つことができ、児童の自己肯定感の高まりにつながった。しかし、友達への否定的な言葉が多く、喧嘩につながることもあった。ふわふわ言葉を意識させる取組や構成的エンカウンターによる人間関係づくりの学習等を1学期早めに実践し、積極的な生徒指導に取り組む必要がある。

思いやり挨拶の定着に関しては、広がりが見られていない。誰とでも自然に挨拶を交わせるために挨拶当番のやり方を見直し、登下校時や学級での挨拶を大切にするような取組を検討する。

新学習指導要領の実施に伴い、地域と連携した授業実践のさらなる工夫が求められる。地域人材をスムーズに活用していくためにも、地域コーディネーターを設置し、系統的に地域学習を進めていけるように校務分掌に位置づけていく。

4. 安心・安全で家庭や地域から信頼される学校づくり

幼保小の連携、小中の連携に課題がみられた。道徳教育における評価方法についての連携と外国語教育の出前授業や英語力向上推進委員同士の情報交換はできたが、他の教科への波及に至らなかった。教職員の意識の中にも、幼小中へと系統的につなげる必要感を十分持っていない。小1プロブレムや中1ギャップの防止のためにも、次年度は保育園訪問や中学校授業参観等交流できる機会を積極的に取っていくようにする。